



切り絵 比企善彦作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072 (622) 2346

http://www.
ibarakijinja.or.jp/

式年遷宮雑感

平成二十五年は五月に出雲大社での「大遷座祭」と十月には伊勢神宮「第六十二回式年遷宮」が斎行され、今なお多くの参拝者で賑わっている。春先より度々マスコミに執りあげられたこともあり、若い世代の人達の多さが目立つと共に参拝作法も心得ていることを感じる。教育の場では教えられないが、ある意味において我が国の文化・伝統のコア・パーソナルな性格がそこにあることだけは漠然とながらも感じていることは確かなようである。

我が国は神話と歴史に切り目が無い国。切り目が無いばかりではなく、今日、神話を投影した祭が全国各地で厳然として毎年行われている。その代表的なお祭で二十一年に一度、大規模に斎行されるのがこの「式年遷宮」である。

例えて言えば、我が国の伝統的家屋は「木造」「茅葺」「障子」。「障子」の紙は毎年張り替え、「茅」は十数年毎、「木造」は数十年毎に造り替える。このように新しく替わりながら一つの家屋として永久なのです。そしてひとつひとつが替わり新しくなる度に気持ちも改まるのです。あのギリシャのバルテノン神殿をはじめとする数多くの遺跡も永遠の願いをもって造られたはず。廃墟の美を楽しませる為に造られたのではないはず。

千三百年もの間、私達の祖先がその時代における義務として、また誇りと感じ造り替え、繰り返し伝えてきたことの中に世界に類例のない偉大なる、そして輝かしい伝統を誇りたいと思う。

遷宮だより

遷御の儀斎行



第六十二回神宮式年遷宮「遷御の儀」が、十月二日に皇大神宮（内宮）で、同五日には豊受大神宮（外宮）で厳肅に執り行われました。同日は午後一時に一般参拝者の神域への参入が停止され、午後三時、奉拝者が続々と神域に参入。午後五時半過ぎに安倍晋三内閣総理大臣ほか閣僚八名、また旧皇族、神社関係者などの特別参列員約三百人、そして衣冠に正装した供奉員二十五名が正宮に向かいました。続いて約三千人の奉拝者が起立する中、皇族代表の秋篠宮殿下が参進されました。

午後六時、静寂の神域に太鼓の音が響き渡り、勅使並びに黒田清子臨時祭主以下、祭員が、正宮の中重に参進され、出御の時を待たれました。

午後八時前、庭燎や常夜灯など一切の明かりが消され、神域は浄闇に包まれると、天戸開きの故事に倣った「カケコー、カケコー、カケコー」の鶏鳴三声が発せられました。

午後八時、勅使が「出御、出御、出御」と唱えられると御正殿内の大宮司・小宮司・禰宜が

御神体を奉戴し、純白生絹の絹垣に囲まれて出御。神楽歌とともに遷御が始まりました。この出御の時刻に合わせて皇居内の神嘉殿では遥拝の儀が執り行われ、香爐架御袍をお召になられた天皇陛下が底上下御という最も丁寧な作法で遷御の儀を遥拝遊ばされました。なお、この遷御の際、静寂な浄闇の中を、一陣の風が吹き抜け奉拝席の周囲は一層幻想的且つ荘厳な雰囲気に包まれました。

午後八時四十分頃、御神体が入宮に入御、大宮司が勅使に遷御の儀を終えたことを伝えた後、祭員の八度拝をもって内宮の遷御の儀が滞りなく納められ、新宮が御正殿となりました。

一方、豊受大神宮（外宮）でも十月五日に内宮と同様の形で執り行われました。

内宮遷御の翌日は一般の参拝が許可される午前五時から宇治橋前には千人を超える長蛇の列ができ、また外宮遷御の翌日は火除橋前に六百人以上の参拝者が列をなして、夕刻の参拝停止時刻まで参拝者は途切れることがありませんでした。

黒井の清水大茶会

かつて豊臣秀吉が当社境内にある井戸の清水で茶をたてさせたという故事にちなんだ「黒井の清水大茶会」が、今年も十月十二日・十三日の両日茨木市観光協会主催で開催されました。

当日は野点の他、箏や当社雅楽会の雅楽の演奏、お楽しみ抽選会、茨木市物産振興協会による茨木の物産品の即売会、喫茶コーナー「黒井のcafe」等の出店。また、ガイドと共に市内を巡る「知っとこツアー」などがあり、二日間で過去最高となる二千八百名を超す方が訪れ終日大いに賑わいました。



抜穂祭齋行

戦前は、現在の中央公園テニスコート付近に神饌田があり、春には御田植祭、秋には抜穂祭が氏子を挙げて齋行されていた。

近年、それに習い少しでありませんが、プランターで伊勢の神宮ゆかりの稲穂「イセヒカリ」をいただき栽培しており、去る十月二十六日に抜穂祭を齋行いたしました。

収穫した稲穂を御神前に御供えし、その後脱穀、十一月二十三日の新嘗祭に新たに供進しました。



東日本大震災

復興支援活動の報告

去る八月十九日から二十一日の三日間にわたり、大阪府神道

青年会（四十歳以下の若手神職の組織）の活動として福島県南相馬市の未だ倒壊した状態にある神社社殿の解体に参加してきました。この地域は福島第一原発から二十キロ圏内にあり、ようやく避難指示が解除された地域です。仙台空港に到着後、バスで現地に向かいました。空港周辺は本当に津波がここまで来たのかと思われるほど見事に復興が進んでいましたが、福島県に入り、立ち入りが規制されている二十キロ圏内に入ると今までの景色が一変しました。この地区は今だ震災の爪痕そのままに、建物ひとつなく一面に野原が広がり、所々に原型をとどめない車が転がり、倒壊をまぬがれた家屋でも窓ガラスは割れ、壁は崩れ落ち、とても住めるような状態ではありませんでした。

その後、目的の神社に到着。この神社は拝殿が完全に倒壊し、かろうじて本殿が傾いた状態を保っていました。早速、地元の方々や福島県神道青年会の方々と共に拝殿の瓦や木材の撤去作業を行いました。

二日目の作業も一応の目途が



たつた後、二十キロ圏内の各神社の様子を見て回りました。この地区はまだ立ち入りが制限されており、震災から二年と半年が経過した今でも支援の手は届かず、震災直後の様子が生々しく目に映りました。津波が押し寄せた場所に鎮座していた神社は跡形もなく、また少し高台にあって津波の被害を受けていない神社でも鳥居や灯籠が倒壊したり、拝殿が傾いていました。その一方で神社が津波の盾となり我が家を守って戴いたという地元の声も聞かれました。

被災された人々のお話をお聞きすると、仮設住宅での暮らしは不自由で、震災前の生活に一

刻でも早く戻りたいが、帰宅もかなわず、また深刻な風評被害を受け、やりきれない思いをされておられました。と同時に時間の経過とともに震災の記憶が忘れ去られないかという懸念も抱かれておられました。

今後私たちが若手神職は「震災と原発事故を風化させない為にも、被災地に心を寄せていきたい」との決意のもと、これからも支援活動を継続してゆく所存です。（権禰宜 正田直也）

これからの主な行事

- 十二月三十一日 越年祭
- 一月一日 歳旦祭 午前十時
- 一月九日～十一日 十日戎祭
- 一月十五日 御火焚（とんど）・祈禱木奉焼祭
- 二月三日 節分祭・鎮魂星祭
- 二月四日 初午祭
- 二月十一日 紀元祭
- 四月八日 人形奉焼祭
- 四月十八日 春祭（祈年祭）
- 奉賛会厄除安全祈願祭

お白石持ち 行事参加

去る八月二十三日・二十四日の両日、「第六十二回神宮式年遷宮」に伴う「お白石持ち行事」に大阪府から岡市宮司を団長として約百名、当社からは二十五名の氏子・崇敬者が特別神領民として参加しました。二十三日は内宮を参拝した後、遷宮行事に奉仕する際に必ず行われる「浜参宮」と言つて、二見興玉神社に参拝、お祓いを受け宿舎へと向かいました。

翌「お白石持ち行事」当日、炎天下での奉仕が心配されましたが、未明までの降雨が幸いし、気温も低く時折涼しい風が吹く



中、行事が始まりました。揃いのハッピを着け、「お白石」を積んだ台車を地元神領民が唄う木遣音頭やお白石持ちの道唄にあわせ、約五百メートルの距離をゆつくりと約三十分程度かけて「外宮」へと奉曳しました。

「外宮」に着いた後「お白石」を白布で覆い奉持して新しい「御正殿」へと進み、一人一人心を込めて「お白石」を奉献しました。

お白石持ち行事は、一般人が新宮を間近に仰ぎ見ることで、真新しい絵の香り漂う御正殿を目の当たりにしたとき、何とも言えない感動が沸き起こるのを感じました。

奉賛会だより

神宮参拝旅行のご報告

当神社奉賛会では去る十一月八日、立冬とは思えぬ心地よい天候の中、約百名が三台のバスに分乗し、遷宮間もない伊勢神宮へ参拝しました。

まずは外宮の神楽殿において「別大々神楽」を奉納、その後瑞々しく檜の薫る外宮御正殿に向かい、木内孝至会長の先導により御垣内特別参拝を行い、続いて外宮旧御正殿を始め旧殿舎などを真近で拝観致しました。なお、この旧御正殿等を間近で拝観できる機会は遷宮を終えた



この時期にしかなく、しかも旧御殿裏から正面御門まで歩行させていただき非常に貴重な体験でした。

その後、昨年この度の遷宮を記念して建設された「せんぐう館」を見学し、内宮へと向かいました。今年十月に神宮では参拝者数が一千万人を超え、これまでの年間参拝者数の過去最高を記録したと報道された通り、初詣を思わせるような人波の中、内宮では自由参拝致しました。早朝からのハードスケジュールでしたが参加者からは今後も引き続きこのような行事を行って欲しいとの声も寄せられました。

